様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　９ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｈ０１２１０

研究課題名（和文）ロシア・アヴァンギャルドにおける文化現象としての音

研究課題名（英文）Sounds as Cultural Phenomena in Russian Avant-garde

研究代表者
八木　君人（Yagi, Naoto）

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：５０４５３９９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,700,000円

研究成果の概要（和文）：　19世紀の最後の四半世紀から20世紀の最初の四半世紀にかけて、たとえば、グラモフォンやフォノグラフといった音の複製技術、電話やラジオの発明や社会への浸透、電子音楽等の新しい音楽装置の登場、都市の工業化による機械音・人工音の増大による環境音やノイズへの自覚等、人々を取り巻く音環境というのがそれ以前の時代に比べて大きく変化した。20世紀前半のロシア・ソ連において、そうした「音」に対する新しい観念・イメージが文化、とりわけ芸術や人文学の分野のなかでいかに受容され、それらが新たにどのような文化的文脈を形成していったかを考証し、その多面性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　いわゆる「ロシア・アヴァンギャルド」を「サウンド」の側面から捉え直そうとする研究は、日本国内はもちろん、外国においてもまだ少ない。そうした点で本研究課題の諸々の成果は、その問題提起のみとってみても十分な学術的意義はある。ただ、新型コロナウィルス感染拡大とロシア・ウクライナ戦争の影響により、さまざまな研究や計画が頓挫してしまい、本来出せたはずの成果が出せなかったのも遺憾な事実ではある。もともと本研究課題の目的としていた当時の音響実験装置や電子楽器等の実物展覧会と、それにあわせた一般向けのシンポジウムの開催が、そうした社会情勢により不可能になってしまったことは痛恨の極みであった。

研究成果の概要（英文）：From the last quarter of the 19th century to the first quarter of the 20th century, the sound environment surrounding people changed significantly compared to earlier periods. These changes were caused by sound reproduction technologies such as gramophones and phonographs, the invention and social penetration of telephones and radios, the appearance of new musical devices such as electronic music, and an awareness of environmental sounds and noise due to the increase in mechanical and artificial sounds by urban industrialization. In Russia and the Soviet Union in the first half of the 20th century, the new conception and image of 'sound' was a major factor in the development of culture. This project examines how these new ideas and images of 'sound' were accepted into culture - particularly in the fields of art and the humanities - and what new cultural contexts they formed, and clarifies their multifaceted nature of these ideas and images of 'sound'.

研究分野：20世紀ロシア文化史

キーワード：ロシア・アヴァンギャルド　音響文化　複製技術　20世紀ロシア文化　サウンド・スケープ　電子音楽

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

19 世紀末から 20 世紀前半、ロシア・ソ連では、「音」の複製技術をはじめとして、音響技術の革新が進み、芸術表現の幅が広がるとともに、「音」に対する観念そのものも変容を迎えた。たとえば、芸術史においてその端緒となったのは、ニコライ・クリビンの「自由音楽」（1909）であるといえようが、この論考のなかでクリビンは、「自由音楽」という概念によって、調性音楽ではなく、調和音と不調和音の結合や、自然の生音（環境音）への意識を呼びかけた。こうした考えは、イタリア未来派のルイジ・ルッソロが主張した「騒音音楽」の先駆けとも評価されている。

しかしながら、クリビンにあらわれるこの理念は音楽にとどまらない芸術概念として機能していた点は見逃してはならない。クリビンの「生音＝騒音＝ノイズ」への志向は、先行するロシア・シンボリズムの理念としての「音楽」を共有しながら、この後、知覚への直接的な働きかけとしてロシア・アヴァンギャルドの（音楽に限定されることなく）各芸術分野において重要な概念であるファクトゥーラ（手触り／触覚）などとも接続していく。このように、新しい「音」の概念は、同時代の芸術運動においても重要な意義を有していた。

また、「音」の概念の拡張は、前述のように同時代の複製技術を始めとする技術革新と密接に関わり、こうした技術が各芸術分野に入り込み新たな展開を生んでいた。当時の諸芸術と併走してあった新しい文芸学や芸術学の分野に関して言えば、例えば、レニングラードの「生きた言葉研究所」（1918-24）では、演劇学者、俳優、音楽学者、医師、文学研究者などが参加し、学際的に「発話」や「発声」についての研究が行われていた。この「生きた言葉研究所」が当時の教育人民委員ルナチャルスキーの肝いりで設立されたという事実は、「生きた言葉」や「発話」という問題がこの時期、社会的にもアクチュアルなテーマであったことを端的に示している。

生音、環境音への意識は、ポスト革命期になると社会との接続を謳う芸術表現へと展開した。例えば、アレクセイ・アブラアーモフの「サイレン交響曲」（1922）は、モーター音や鐘の音など、都市空間の環境音を統合して実際の都市空間で壮大な音響空間を創出する試みだが、この実践は新しい大衆社会創造の思想と結びついていた。彼は、調性音楽は作曲家あるいは演奏家個人の思想の現れであり、一方、警笛やモーター音は無個性の大衆社会の音と位置づけ、都市空間に溢れる「社会の音」を「個人の音」に対置させている。彼はそこから都市空間における音楽的素材の空間的構成「地形学的音響学」の計画を作成し、都市空間の「録音」と結びついた音楽ジャンルを新たに研究している。

こうして、複製技術が環境音と結びつき、同時代には映画監督のジガ・ヴェルトフも、都市の音を採集するフィールド・レコーディングの実験を試みている。それは後に『カメラを持った男』において都市空間を写し取るファクトの概念へと近接していくのだが、「映画眼」で有名なヴェルトフはまた、「我々は録音装置、グラモフォンを知っている。だが他の、より精度の高い装置もある。それらが録音するのはあらゆるかすかな音、ささやき声、滝の轟音だ」と録音装置への期待を表明しているように、「音」に対しても強い関心をもっていたことは強調しておかねばならない。これはヴェルトフに限ったことではなく、映画というジャンルがサイレントからトーキーへと移行する時期の、映画における「音」の意義をロシア映画史の文脈で捉える必要もあるだろう。

さらには、こうした新技術含め科学技術と芸術文化との関係は、単に芸術の側が影響を被ったのみならず、往還運動であったことは見逃してはならない。その顕著な例がテルミンボクスやシンセサイザーといった電子楽器である。史上初の電子楽器を発明した物理学者であり音楽家でもあるレフ・テルミンはもとより、芸術家として活動していたボリス・ヤンコフスキーが音を線描画に変換する装置を開発するなど様々な発明品が生まれた。こうした新技術とともに「音」は表現の素材として展開していくとともに、人々の知覚に少なからぬ変化をもたらしたはずである。

このように「音」をめぐるこの時代の実践は、各ジャンルを横断して極めてダイナミックなものとしてあった。そうした主題に関する主要な先行研究としては、論集『ロシア・アヴァンギャルドの百年』（マルガリータ・カトゥニャン編、2013）、オクサーナ・ブルガーコワ『文化現象としての声』（2015）、ヴァレリー・ゾロトゥヒン／ヴィタリー・シュミット編著『鳴り響く芸術のことば：芸術のことば研究室の仕事（1923-1930）』等が挙げられるが、いまだ緒についたばかりだといえ、従来の個別研究の蓄積はあるものの、「音」を巡る総合的な研究は十分になされているとは言い難い。こうした点を踏まえ、感性的な変化が顕著に現れてくる当時の芸術作品全般や社会現象全般を射程に入れて検討し、個別研究の成果を相互に比較・対照しながら、「音」を「文化史」のなかへと総合的に位置づける必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀前半のロシア・ソ連において、「音」という現象がいかに文化のなかで受容され、それらが新たな文脈としていかに形成されていったかを考証するものである。とりわけ、ロシア・アヴァンギャルドという芸術運動における文化現象としての「音」を横断的に検

証し、それを可能とした感覚・知覚の時代的布置を明らかにすることを目的とする。そのことを通して、たとえば、音の複製技術の登場、電子音楽等の音楽装置の発明、環境音への自覚化など、技術革新や音の概念の拡張が、同時代の社会及び諸芸術に与えた影響を詳らかにすることを目指す。

また、本研究の学術的な成果を積極的にアウトリーチしていくことも、強い意味での目的としたい。具体的に考えているのは、ロシアの研究協力者として承諾を得ている初期ソヴィエトの電子音楽の専門家の所有する、当時の音響実験装置や電子楽器等の実物展覧会や、それにあわせたシンポジウムの開催などである。

３．研究の方法

便宜的に以下の三つの部門に分けて共同研究を実施した。もっとも各部門は明確に分けられるわけではないため作業仮説にすぎず、各部門のそれぞれの段階で得られた成果を、国際学会および論集を通して統合し、発表することで、「ロシア・アヴァンギャルド期の文化現象としての音」に関する包括的・総合的なヴィジョンを呈示することを目指した。

１）ソ連における 1930 年代までの各芸術分野における「音」にまつわる理論を精査し、観念・概念としての「音」の分析。
２）ロシア・アヴァンギャルド芸術における「音」に関わる実践の精査、ジャンル間の相互関係の分析。
３）フォノグラフやグラモフォンをはじめとした当時の音響技術のソ連における普及・使用状況を調査し、それらが芸術・人文学の領域に与えた具体的な影響の分析。

上記のようなかたちでの個別研究とその総合研究とは別に、1920-30 年代の音響実験装置や電子楽器の実物展覧会開催へ向けての調査や実際的な打ち合わせ等を進めていった。

４．研究成果

残念ながら、新型コロナウィルス感染拡大と、ロシア・ウクライナ戦争により本研究課題の目的の多くは頓挫してしまった。とりわけ、大きな目的のひとつであった 1920-30 年代の音響実験装置や電子楽器の実物展覧会とそれに伴う国際シンポジウムの実施が不可能となった。とりわけ、新型コロナウィルス感染拡大状況が沈静化の兆しを見せはじめ、海外との人やモノの往来が可能となりはじめた矢先、2022 年 2 月 24 日に開始されたロシア政府によるウクライナ侵略は、「戦争」という、「コロナ」と同様にいつ終わるかわからぬ、展覧会や国際シンポジウム開催という点ではきわめて難しい状況を生み出した。展覧会とそれに伴う国際シンポジウムの開催はわれわれの悲願であったため、最後までその可能性を諦めたくはなく、「戦争」に伴う計画変更は（結果的に）後手に回ってしまった。そのため、（繰越等を含め）４年間の補助金の直接経費の総計 6,700,000 円のうち、3,120,000 円強を返還した。

個別研究等の成果については、「主な発表論文等」の項目を参照されたいが、共同研究としての本研究課題の成果としては、主に以下の３つが挙げられる。

１）日本ロシア文学会第 69 回（2019 年度）研究発表会におけるワークショップ「ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ」の開催（2019 年 10 月 27 日（日）、早稲田大学）

本ワークショップでは、八木君人「音声の複製技術時代におけるロシア・アヴァンギャルド詩」、梅津紀雄「20 世紀前半の前衛音楽における楽音」、伊藤愉「1920 年代ロシア演劇における聴覚文化」、そして、大平陽一「ロシアにおける最初期のサウンド映画について」と題する報告を各人がおこない、その後、ディスカッサントとして安達大輔がコメントをし、会場を含めた質疑応答を行った。

「音」「音響」「音楽」という主題をジャンル横断的に扱ったこのワークショップを通して、国内のロシア文化研究者に「ロシア・アヴァンギャルド」のもつ「サウンド」の問題を広く提示することができた。それと同時に、「サウンド」に関するさまざまな観念、それに対するさまざまなアプローチを示すことができ、文化史におけるその重要性を示すことができたと自負している。なお、各人の報告の概要については、本ワークショップの報告が掲載されている日本ロシア文学会誌『ロシア語ロシア文学研究』第 52 号、2020 年、308-315 頁を参照されたい。

２）国際カンファレンス「ソヴィエト・アヴァンギャルドと音響文化」の開催（2023 年 3 月 21 日（火）、早稲田大学／対面＋zoom を使用したハイブリッド形式）

本研究課題と、研究分担者の一人である伊藤愉を研究代表者とする国際共同研究強化（A）「社会主義リアリズム前史としてのロシア演劇：アーカイヴ調査に基づくリアリズムの考察」を主催とし、また、研究分担者の一人である安達大輔を研究代表者とする基盤研究（B）「ロシア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」等の共催で、ロシア・アヴァンギャルド演劇、モダニズムのパフォーマンス、初期サウンド・レコーディング等を専門とするヴァレリー・ゾロトゥヒン（ルール大学ボーフム訪問研究員）と、ロシア映画研究・ドイツ映画研究を専門とし、ロシアの音響文化全般を扱った単著『文化現象としての声』(2015)

もあるオクサーナ・ブルガーコワ（マインツ大学名誉教授）を招き、それぞれ、「1920 年代の文学関係の録音とその聴取の技術」（ゾロトゥヒン）、「未来派とホモジナイザー、あるいは、初期ソヴィエトのサウンド映画における声、音楽、ノイズ」（ブルガーコワ）と題する講演をおこない、司会を伊藤愉が、ディスカッサント（のような役割）を八木君人が務めるかたちで国際カンファレンスを開催した。ゾロトゥヒンの講演では、アレクサンドル・ブローク、ニコライ・グミリョフ、ウラジーミル・マヤコフスキーら、1910-20 年代の詩人や作家たちによる自作の朗読の録音に関する広範な紹介を踏まえた上で、その録音素材がレコードのかたちで流通していく過程で生成する聴取のかたち（の変貌）を、「記憶」の問題と結びつけながら詳らかにするものだった。一方、ブルガーコワの講演では、ソヴィエトの 20 年代のサイレントの映画監督たちが「視覚的無意識」を組織化しようとしたのと同様に、アレクセイ・くるチョーフィフら立体未来派の詩の実験にも比されるかたちで、初期ソヴィエトのサウンド映画がいわば「聴覚的無意識」と対峙する様子がさまざまな事例と共に語られ、ノイズ、静寂、会話、セリフといったさまざまな音響が、「音楽」を媒介することで別の次元へと移され総合されること、そしてそのことがさらには 30 年代以降のソヴィエト映画における「声」の使用や、演劇における発声の方法にも影響を与えたことが示された。聴衆の数は、必ずしも多くはなかったものの、質疑応答は活発に行われ、きわめて興味深い、生産的なカンファレンスを開催できたと自負している。

3）アンドレイ・スミルノフ『失われた音を求めて：20 世紀前半のロシアとソ連の実験音響文化』（Garage，2020）の邦訳刊行（予定）

本研究課題のロシアにおける研究協力者の一人であるアンドレイ・スミルノフによる当該テーマに関する重要な上記著作が 2020 年にモスクワで刊行された。スミルノフはすでに 2013 年に『Sound in Z：20 世紀初めのサウンドと電子音楽における実験』をロンドンにて英語で刊行しているが、2020 年に刊行された本書はその増補版であるといえる。われわれが企画していた展覧会での展示物の多くもスミルノフの所蔵によるものを考えていたのだが、上述した通り、新型コロナウィルスの感染拡大やロシア・ウクライナ戦争によりその実現が不可能になってしまったため、八木君人と伊藤愉とで本書の邦訳刊行の準備を進めた。全体の下訳はすでにほぼ完了しているものの、全体にわたる固有名詞や約物の統一といった技術的なことのみならず、引用文の出典先の確認、音楽用語、音響工学用語、電子機械用語等の訳語のチェックなどはまだ十分にできておらず、補助金交付期間内の刊行は間に合わなかった。今後、訳文を彫琢し、刊行したいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 安達大輔	４．巻 35
２．論文標題 音楽の後に：ゴーゴリの詩学におけるリズムの問題へ向けて	５．発行年 2020年
３．雑誌名 SLAVISTIKA（沼野充義教授退職記念号）	６．最初と最後の頁 169-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ａдати Д.	４．巻 図書
２．論文標題 Язык и поэтика Гоголя в трудах В. В. Виноградова по истории русского литературного языка	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Грамматика в обществе, общество в грамматике: Исследования по нормативной грамматике славянских языков	６．最初と最後の頁 99-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤愉	４．巻 67
２．論文標題 ロシア演劇学の誕生―レニングラード学派とメイエルホリド―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 スラヴ研究	６．最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤愉	４．巻 冊子
２．論文標題 COVID-19 影響下のロシア演劇概観	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『「COVID-19 影響下の舞台芸術と文化政策――欧米圏の場合」報告冊子』	６．最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 М．Ито．	4．巻 46
2．論文標題 "Исинха": Путешествующий зритель．	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Театр	6．最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤愉	4．巻 図書
2．論文標題 スタニスラフスキーとメイエルホリド――演出家の誕生	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ロシア文化55のキーワード』	6．最初と最後の頁 124-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤愉	4．巻 147
2．論文標題 近くて遠い音：ロシア・アヴァンギャルド演劇の音響実験	5．発行年 2022年
3．雑誌名 文芸研究	6．最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 M. Ito	4．巻 図書
2．論文標題 Discussions on Theatre Spaces and Theatre Materials by the Leningrad School	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Performance spaces and stage technologies: a comparative perspective on theatre history	6．最初と最後の頁 134-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 伊藤愉	4．巻 臨時増刊
2．論文標題 ロシア芸術における抑圧と分断	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『世界』臨時増刊 ウクライナ侵略戦争――世界秩序の危機	6．最初と最後の頁 167-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅津紀雄	4．巻 図書
2．論文標題 国際チャイコフスキー・コンクール――米国人の勝利か、ロシアの伝統の勝利か	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ロシア文化55のキーワード』	6．最初と最後の頁 116-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅津紀雄	4．巻 雑誌
2．論文標題 ウクライナ戦争とロシアのクラシック音楽界の現在：二重の踏み絵は 新たな鉄のカーテンか	5．発行年 2022年
3．雑誌名 『チェマダン特別号――ウクライナ侵攻とロシアの現在』	6．最初と最後の頁 54-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 梅津紀雄、半谷史郎	4．巻 第59巻第1号
2．論文標題 第3回国際青年友好スポーツ大会にみる雪解け期の日ソ・ スポーツ交流 ： あるレスリング選手のソ連体験	5．発行年 2021年
3．雑誌名 工学院大学研究論叢	6．最初と最後の頁 81-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 八木君人	４．巻 図書
２．論文標題 ロシア・フォルマリズム――その理論の歴史（性）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『ロシア文化55のキーワード』	６．最初と最後の頁 180-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 八木君人	４．巻 雑誌
２．論文標題 「文化」のナショナリティについての覚書	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『チェマダン特別号――ウクライナ侵攻とロシアの現在』	６．最初と最後の頁 8-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 八木君人	４．巻 図書
２．論文標題 ヴィクトル・シクロフスキー『散文の理論』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『文学理論の名著５０』	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 八木君人・梅津紀雄・伊藤愉・大平陽一・安達大輔	４．巻 52
２．論文標題 第69回全国大会・パネル「ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ」報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ロシア語ロシア文学研究	６．最初と最後の頁 326-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 Адати Д.
2．発表標題 Мелодрама и мелодраматическое в русской культуре тридцатых- сороковых годов XIX века (к постановке проблемы)
3．学会等名 Міжнародна науково-практична конференція XI Короленківські читання (e-Tutorium)（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 Daisuke Adachi
2．発表標題 Melodrama and Irony: A Short Introduction, The 5th International ScientiPractical Student Conference “The Contemporary English Scientific Discourse”
3．学会等名 Scientific and Methodological Center of English Language and World Literature Quality Control of Poltava V.G. Korolenko National Pedagogical University（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Daisuke Adachi
2．発表標題 From Moral to Love?: On the Melodramatic Imagination in Late Nineteenth-Century. Russian Drama
3．学会等名 ICCEES 10th World Virtual Congress（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Daisuke Adachi
2．発表標題 Nature’s Mistake: Gogol’s Writing as Self-Reflection of Photography
3．学会等名 SRC 2021 Summer International Symposium “Slavic and Eurasian Studies in Times of Uncertainty: Dialogue and Reappraisal”（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Daisuke Adachi
２．発表標題 Melodrama and Irony in 1830s Russia
３．学会等名 Special session on 19th-century Russian Melodrama with views from Japan
４．発表年 2021年

１．発表者名 Ｍ．Ито．
２．発表標題 Путешествующий зритель: Японский театр Исинха (1970-2017) и опыт зрителя．
３．学会等名 Международная конференция "Театр в публичном пространстве: эстетика, экономика и политика спектаклей in situ"（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 土方与志と「ソヴェト」作家シーモノフ：戦後新劇とソヴィエト文化の受容
３．学会等名 日本演劇学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 レニングラード学派における上演空間、舞台上の事物
３．学会等名 中央大学第28回学術シンポジウム「グローバル文化史の試み」
４．発表年 2021年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 ウクライナ情勢：文化面での反応：演劇
３．学会等名 SRC緊急セミナー「ウクライナ情勢：文化面での反応」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 侵攻開始以後のロシア演劇界の状況ーー演劇雑誌Ｔｅａｔｐ.タイムラインを軸に
３．学会等名 「国際演劇年鑑」ワールド・シアター・レポート（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 ウクライナ侵攻から考えるロシア文化・芸術
３．学会等名 鳥取市民大学（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 ウクライナ侵攻とロシア演劇
３．学会等名 北海道スラブ研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 梅津紀雄
２．発表標題 ウクライナ情勢：文化面での反応：音楽
３．学会等名 SRC緊急セミナー「ウクライナ情勢：文化面での反応」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 梅津紀雄
２．発表標題 クロイツァー：帝政ロシア出身のユダヤ系音楽家と日本
３．学会等名 日露交流史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 伊藤愉
２．発表標題 1920年代ロシア演劇における聴覚文化（WS「ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ」））
３．学会等名 第69回日本ロシア文学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 八木君人
２．発表標題 音声複製技術時代におけるロシア・アヴァンギャルド詩（WS「ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ」））
３．学会等名 第69回日本ロシア文学会全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoto Yagi
２．発表標題 Ilia Zdanevich’s “vsechestvo” and the Phonograph
３．学会等名 “The Dynamics of Cultural Processes between Center and Periphery”（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 チェマダン編集部（伊藤愉、河村彩、八木君人）編	４．発行年 2022年
２．出版社 チェマダン編集部	５．総ページ数 206
３．書名 『チェマダン特別号――ウクライナ侵攻とロシアの現在』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	伊藤　愉 (Ito Masaru) (00816556)	明治大学・文学部・専任講師 (32682)	
研究分担者	梅津　紀雄 (Umetsu Norio) (20323462)	工学院大学・工学部・講師 (32613)	但し、2020年度以降。
研究分担者	安達　大輔 (Adachi Daisuke) (70751121)	北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・准教授 (10101)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大石　雅彦 (Oishi Masahiko) (10160417)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	但し、2019年度のみ。

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
ソヴィエト・アヴァンギャルドと音響文化／Советский авангард и звуковая культура	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関